

風見鶏に託された ブレグジット ボリス新首相で高まる不安

経済ジャーナリスト

八雲 豊彦

EU離脱派の旗頭、ボリス・ジョンソン氏が2019年7月24日に英国首相に就任した。問題発言、女性問題……。お騒がせなキャラクターが庶民的と人気を集め、支持率低下にあえぐ与党、保守党が送り出したが、日和見主義との評判も。混乱が続く離脱問題は、いつそう先が見えなくなっている。

待ちに待った首相就任 残留発言の歴史も

国民投票で離脱が決まったのは2016年6月だった。英国のブレテンと退出を意味するエグジットをあわせブレグジットと呼ばれ、EU（欧州連合）域内で無関税となる関税同盟にとどまって穏健に離脱するソフトブレグジットか、完全に縁を切る強硬離脱、ハードブレグジットか、世論を二分した。国民投票結果

を受けて首相になったテリーザ・メイ氏は迷走し離脱問題を解決できなかった。

ジョンソン氏はメイ政権で外務・英連邦大臣をつとめていた。メイ氏が閣内合意をとりまとめたEU離脱後の方針に抗議し2018年7月に辞任し、強硬離脱派と目されていた。待ちに待った首相就任だった。強硬離脱に走る危険を世界中が感じた。米大手モルガン・スタンレーは



テリーザ・メイ前英国首相

ハードブレグジットの場合、ポンドドルは現状の1・25倍前後からパリティーといわれる1倍の等価となると予測、市場を怯えさせた。輸入依存度が高い英国経済でポンドの暴落は、物価高を招き今も好調とは言えない景気を冷え込ませる。英政府も、ハードブレグジットで2020

年末までに国内総生産（GDP）を2%押し下げるとの試算を公表している。

だれも利益を得られないハードブレグジット。離脱派のリーダーとみられたが、実はジョンソン氏は風見鶏のポピュリストとしての定評があった。国民投票を控えた2016年2月、コラムでEUを「すぐ手が届く市場。会費は比較的安い。なぜそれほど頑固に離脱したがるのか」と残留派だった。その後、離脱派にかわり国民投票の勝利で祭り上げられているうちに「鎧を脱げなくなっ

た」という関係者もいる。

強硬離脱は見せかけか 期限は10月末

どう離脱を誘導するのか、世界が注目している。

7月25日にあった初の議会演説。ジョンソン氏はEUに対し、離脱協定案で合意した内容を見直す英国国家への反対を「考え直す」よう要求。「さもなければ合意なしでEUを離脱しなければならぬ」と述べ10月31日の離脱期限に向けた準備を「加速する」と宣言した。

演説は、EUに英国側の修正案の再考を求める一方、ハードブレグジットがあるとすれば、EUの責任と牽制したのだ。修正案は英国が北アイルランドと、EUに残るアイルランド間で厳しい国境管理を延期させる内容だった。離れていくのに国



ボリス・ジョンソン英国首相

境をそのままにするわけにはいかない。当然、EUは認めず、メイ氏は修正案を英議会に提案したが紛糾。保守党内でも意見がわかれ、メイ氏は政権を投げ出さざるを得なくなつた。

議会演説でジョンソン氏は、勇ましいハードブレグジットを最初に持ち出すのではなく、国境管理の英国案を認めさせることをまず、掲げた。EUは当日のうちに協定案の修正要求を一蹴した。当たり前だ。ハードブレグジットになるなら、その責任をEUに転嫁させ、修正案に合意させるようとする戦略だった。

だが、協議の時間は残されていない。英議会は7月24日から9月4日まで夏休みに入り9月14日から10月9日まで党大会で議会は休会する。10月のEU首脳会議が開催されるのは17日からの2日間。約1週間あまりで英議会が審議することは不可能で、水面下での協議に関心が集まっている。

ハードブレグジットをいとわない姿勢で、協議のテーブルを拒否するEU側から譲歩を引き出したいジョンソン氏。景気停滞懸念があるEUにとつてもハードブレグジットに伴うマーケットの混乱は、本格的なEU崩壊のボタンを押す可能性もあり、避けたいと思っているからだ。

外交手腕に疑問符 恐怖を招く偶発離脱も

保守党内や野党対策、EUとの交渉で、ジョンソン氏に高度な政治力と外交手腕が求められている。髪形や大胆な言動で「英国のトランプ」といわれるが、実行力はあるのだろうか。

メイ政権時、ジョンソン氏の外相

就任を知らされたアメリカのマイク・トナー国務省報道官は失笑し、初の対外公務となったフランス大使館でのレセプションで招待客からブーイングで迎えられた。ジャン・マルク・エロー仏外相から「嘘つき」と名指しで批判されたこともあった。バラク・オバマ前米大統領が英国のEU残留を求めた際には「オバマはケニア人の血が入り、反英感情がある」と発言、人種差別的であるとして物議も醸した。国際的にもあまり信用があるとは言えず、プライベートでも女性とのトラブルも多く、6月にも新しい恋人と家で激しく口論し警察を呼ばれている。

脇が甘いのだ。もつとも、この緩さが人気を呼び、離脱問題で支持率を下げる保守党内で党首に持ち上げられた原動力だった。つまり、外交をはじめ政治力はあまり評価されていないとみられる。

首相就任後は、メイ政権時の閣僚が組閣を前に次々に辞任。離脱強硬派を閣内に送ろうとし、すでに党内で波風を立てている。盤石の船出とは言えず、労働党をはじめとした野党は内部崩壊を待っているという。

EU関係者は、ハードブレグジット後の経済的混乱をおそれるEUに修正案を投げかけることで、期限を再延期させるのが本来の狙いとみている。しかし、離脱期限が迫り合意なき離脱の現実性が高まると、保守党内の残留派と穏健離脱派の同調者を得て内閣不信任案を可決させるか、総選挙を選択させる可能性もあるという。英国内で政治的停滞も懸念されている。

最も恐ろしいのは、こうした策略の中で暴発する偶発的なハードブレグジットだろう。ジョンソン氏への支持や国民投票の結果は、EUへの嫌悪をベースとしたポピュリズムであつて、離脱後の青写真はなかった。結果に驚き混迷を深める現状で、ジョンソン氏が軽率な言動や行動でカストロフを招く危険は否定できない。最終的に期限延期を目標むジョンソン氏の戦略自体も綱渡りで、多くの敵に囲まれ渡りきれぬかどうか。

国民投票から3年余。ブレグジットはいまだ視界不良で、リスクはこれまで以上に高まったといえそう